



雪かきの合間に

朝は少し日も差す天気でしたが、8時過ぎから急変。
鈍色の雲がやってきて大雨、そして雪へ。
天気予報は嘘をつきませんね。災害級の大雪にならないことを願っています。

さて、昨年12月上旬、職場と自宅にシクラメンを購入（私費です）。
職場のシクラメンは、1ヶ月以上過ぎても元気に咲いている。 ⇨
北向きの寒い職場もシクラメンにとっては快適な場所らしい。
が、自宅の花はリビングの環境がよくないのか、元気がない。
室温が高いためかもしれないと思い、廊下に移動したが復活せず。
その花に適した環境を与えないと、咲き誇らないということですね。



適した環境で花を咲かせるのは、植物だけではなく人間だって同じ。
学問で花を咲かせる人がいれば、音楽で花を咲かせる人、スポーツで花を咲かせる人もいる。
ボランティアで花を咲かせる人や、学校行事・生徒会行事で花を咲かせる人もいる。
その人、その人が輝くことができる環境がある。
その人に適した環境、花咲く環境を整え、アドバイスしていくことができれば、と思う。
とこいつつ、自分の価値観を優先させ、「こうあるべき」と押し付けていないだろうか…。
かつての自分の指導を振り返っても、一人一人に応じた環境を整えていたか自信はない。
教師主導の授業や部活動を行っていたように思う。

1月20日付の内外教育「授業における『問い』とは」に、次のような言葉があった。
子供の主体性を尊重しすぎると、共通的に身に付けさせたい内容が保証されなくなる。
教師が指導性を発揮しすぎると、子供の主体性がそがれ、学習態度が受動的になる。

確かに、教師の指導性が強すぎると受け身の授業態度になる。
かといって主体性に任せ過ぎると、生徒は楽な方、苦勞せずできる方へ流れていってしまう。
主体性と指導性、そのバランスが大事だと思う。
内外教育は、次のように続く。

「問い」を子供の疑問として捉えると、それは教師にとって子供から引き出すもの。
一方の子供にとっては、「問い」は感じるもの、湧き出てくるもの。
教師には価値ある「問い」が生まれる学習環境を設定する力とともに、
子供の疑問を引き出し受容する力が求められる。

価値ある「問い」が生まれる学習環境を設定した授業とは？
明日は大雪予報のため学校は休業。
雪かきの合間に、「問い」が生まれる授業のアイデアを練ってみてはどうでしょうか？